

# 幕末維新期における英勝寺と水戸家

— 正姫の入寺・還俗を事例に —

*Amadera* of Mito family in Meiji Restoration period:  
The case of a Priestess Masahime in Eishō-ji

具 知會\*  
JeeHoe KOO

## 1. はじめに

江戸時代の女性と寺院との関係に関する研究といえば、まず駆込寺や比丘尼御所などがあげられる<sup>1</sup>。一般的に庶民の女性は特定の尼寺に駆け込むことによって離婚を認められることができ、皇族や公卿の女性は出家して比丘尼御所で住持となることで、寺院での生活が保証されていた。また武家（大名家）女性の信仰生活も熱心であり、夫の死後落飾する者は多くいたが、実際の寺院での生活についての記録は少なく、その実情はあまり知られていない。

そうしたなかわずかではあるが、幕末期鎌倉英勝寺の住持となった水戸藩主徳川斉昭の娘である正姫に関する記録が『英勝寺御用留』（以下『御用留』と略記する）<sup>2</sup>のなかに残されている。英勝寺は現存する鎌倉唯一の徳川家ゆかりの尼寺で、徳川家康の側室である英勝院によって創建された。英勝院が水戸徳川家の初代藩主である徳川頼房の養母となった縁により、代々水戸家の息女が英勝寺の住職を務めること

になった。そのため英勝寺は水戸家の「御殿」と呼ばれており<sup>3</sup>、他の寺院にはみられない特殊な格式をもっていた。その英勝寺に江戸時代最後の住持となったのが正姫であった。正姫は、元治元年（一八六四）六歳の時に幕命によって英勝寺の住持となるが、明治二年（一八六九）には還俗し、斉昭の五男で鳥取藩主の池田慶徳の養女となった。その後池田家の支族である旧鹿奴藩主池田徳澄と結婚するも、明治六年に若くして逝去するという生涯を過ごした人物である。本稿の目的は、このような正姫の入寺・還俗、さらに養女縁組から婚姻、逝去に至るまでの過程を幕末維新期における政治情勢のなかで考察していくことで、大名家（とくに水戸徳川家）の女性の尼寺入寺・還俗が持つ意味を明らかにすることにある。

近年の研究状況に鑑みても、江戸時代後期以降の武家女性と寺院に関する研究は進捗しつつあるとはいえ、とくに大名家の姫が入寺及び還

\* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：尼寺、英勝寺の住持、正姫、還俗、水戸藩の明治維新。

俗する歴史的過程についてはそのケースも少ないことから研究自体ほとんどないのが現状である。本稿で取り上げる英勝寺に関しても、これまで経済史や建築史・美術史的観点から研究が行われてきたに過ぎない<sup>4</sup>。英勝寺は水戸徳川家の姫という大名家女性が代々入寺した尼寺にもかかわらず、政治史的・女性史的な観点からの研究は未だ進んでいないのである。住持となった歴代の姫に関して唯一小丸俊雄氏の研究（一九六四）があるが、そもそも正姫が英勝寺住持として勤めた期間がわずかであったこともあり、英勝寺での普段の生活の様子などはよくわかっていない。また小丸氏の研究（同）は、正姫の英勝寺への入寺前の経緯や退寺・還俗後の動向などについては記述がない。

そこで、本稿では、正姫の入寺・還俗、婚姻、そして逝去するまでの過程を史料に即して具体

## 2. 英勝寺と水戸家の関係

英勝寺の歴史は江戸時代初期から始まる。創建者のお勝は徳川家康の側室で、家康の命により初代水戸藩主となった徳川頼房の養母を務めた。家康の死後、お勝は落飾して英勝院と称し、三代将軍徳川家光より父祖の地である扇ヶ谷の地を賜い、英勝寺を創建した。その後、家光は寛永十四年（一六三七）、十九年と二度にわたり三浦郡池子村の地四二〇石を寄進し、池子村は幕領から英勝寺の寺領となった。英勝院の没後、頼房の娘を英勝院の養女として英勝寺開山住持とするなど家光の厚遇は続き、慶安元年（一六四八）には、英勝寺は勅願所、紫衣の寺格に列した<sup>6</sup>。こうした経緯から英勝寺は代々

的に考察する。幕末維新期における水戸藩の事情を踏まえながら『御用留』に加えて『贈従一位池田慶徳公御伝記』（以下『伝記』と略記する）<sup>5</sup>等を活用した考察を行うことで、より詳細に実態を明らかにすることが可能となる。御三家の一つである水戸徳川家の姫である正姫が幕末維新期に英勝寺に入寺・還俗し、さらに支族である池田家の養女となって婚姻するなど、正姫の事例が極めて特殊なケースであったとしても、そこには必ず何らかの政治的意図が存在しており、当時の大名家の女性としての生き方が反映されているはずである。明治維新という歴史過程において武家（大名家）女性と寺院との関係がどのように変化したのか、その政治的背景・影響を究明し、正姫の入寺・還俗の意義について考えていきたい。

水戸家の姫が住職を務める格式ある尼寺へとなっていった。

英勝寺は、他の寺院のような檀家や修行・学問をする尼僧の姿もなく、寺院・僧尼の支配組織である本末体制の枠外にある、まったく特殊な寺院であった。これは建立目的が開基お勝の菩提、将軍家・水戸家の武運長久の懇祈にあったことによる。そのため、寺院近隣の人々はもとより、池子村領民にも英勝寺信仰が根付くことはなかった<sup>7</sup>。入寺して住持になった水戸家の姫は方丈様と言って、世俗の宗教活動は一切なく、大法要の導師はすべて鎌倉の光明寺など他寺院の僧が勤めた。英勝寺で働く老尼・お次

女中・表方の諸侍は水戸家から任命され、扶持は知行所のあがり高から与えられた。しかし、御留守居のように高額の知行取となると、その三分の一は水戸藩からも支給されていた。また米納の他に銭納あるいは立木売払代、米売払代など特別収入もあったが、この他に水戸藩から合力金、国元よりの利金があった<sup>8</sup>。

このように、英勝寺は三代将軍家光の寄進によって創建され、「姫の御殿」という特殊な格式を持ち、財政的には水戸藩に頼ることになった。つまり、水戸家から姫が英勝寺に入寺するということは、英勝寺とその寺領が水戸藩の影響下にあることを示す。水戸家の姫が入寺することで、水戸家の女性としての身分が保証・維持され、公的には鎌倉に水戸徳川家の権威を表す象徴的役割を果たすことになったのである。

しかし、幕末期になると英勝寺も衰退の一途を辿った。既に幕府との縁は薄く、水戸藩の財政が悪化するなか資金援助もままならなくなり、これまでのような藩の全面的な庇護は受けられなくなっていた<sup>9</sup>。そこで、英勝寺は高い格式を維持するための費用を捻出するために江戸での名目金貸附の許可を求めて貸附所設置願を幕府へ願い出た。

【史料一】<sup>10</sup>

嘉永元八月中、寺社奉行久世出雲守殿江御城付人見又左エ門を以て御内談之写  
鎌倉扇ヶ谷英勝寺祠堂金之儀、以前水戸殿領内江貸附右利潤を以て堂宇修復向等の手当ニ被致候所、領内而已ニ而融通不宜候付、文化十一戌年御老中松平伊豆守殿江及御内談候上、鎌倉近頃御年貢上納指支候者江者（於寺内水戸殿<sup>5</sup>被附置候役人共を以）貸

附取扱候処、英勝寺堂宇等廣大之儀ニ而、追々及大破修理等之用途不少、寺内諸懸り水戸殿<sup>5</sup>助成被致来候処、近来勝手向万事被指支、鎌倉表之儀自然不被行届、英勝寺於而も種々指支多、往々手当向甚苦心致居候由、依之此度於御府内市中者共江貸附け、浮金を以て修理手等当ニ備申度旨、英勝寺<sup>5</sup>願之趣も有之候処（中略）前書祠堂金の儀者大猷院様配慮被為在候御金筋之儀ニ付、永世滅却無之様被申伝別格之訳柄ニ候得ハ、此度英勝寺願之通御府内（十ヶ年之間）貸附相済候様、於水戸殿も被相願候積罷在候付、此段及御内談候様家老共申候

【史料一】によると、英勝寺による祠堂金貸附の起源は文化十一年（一八一四）、松平伊豆守に内談して鎌倉で貸附したことがわかる<sup>11</sup>。それが、嘉永元年（一八四八）になると、英勝寺の財政事情はますます悪化し経済的に立ち行かなくなったことから、江戸で貸附の願書も願い出たのである。

この時期、英勝寺が抱えていた問題は財政面だけではなく、文政十二年（一八二九）に藩主となった徳川斉昭は、藩政改革を行うなかで領中寺院への調査に乗り出し、淫祠、邪教と認定した百余寺の取り潰し、不良僧侶等の放逐・還俗など、「廃仏政策」に着手したのである。英勝寺もその影響を受けるかと思われたが、結果的にはとくに何も行われることはなかった。その理由として、水戸藩の領地から離れている鎌倉に位置していたこと、寺院とはいえ水戸家の姫が入寺し、仏教修行とは無関係であったこと、水戸藩の祠堂金貸附所であったことが推察される。ただし、嘉永六年（一八五三）に英勝

寺の第六代住持清吟尼が示寂すると、元治元年（一八六四）までの約十年間住職がない状態となった。これは後述する【史料二】にあるよ

うに、水戸家の姫を入寺させたくないという仏教嫌いの齊昭の意向が強く働いていたことに起因していた。

### 3. 正姫の英勝寺入寺と生活

#### 3.1 入寺の背景

正姫が英勝寺に入寺する事情については、鳥取藩主池田慶徳に宛てた元治元年（一八六四）十一月二十日付水戸藩士長谷川作十郎らの書状でうかがい知ることができる。元治元年は正姫が六歳の時であり、水戸藩内で二条家への縁談を推し進める尊攘派の天狗党と幕府の意向に従おうとする諸生党との対立がますます激化した年であった。

【史料二】<sup>12</sup>

（前略）既ニ正姫様御儀、兼々二条殿<sup>13</sup>え御内約被為在候処、鎌倉英勝寺久敷御無住ニ付、可然御方も候は、為御住持被遣候様、幕命有之、就夫、正姫様、俄ニ右尼寺え被遣候儀ニ相決し、当月始、以御直書御破約之儀、二条殿え被仰進、然ル処、右尼寺之儀は、烈公様兼て思召も被為在、以来御無住ニ可被成旨御遺書も有之候処、前条之都合、全く内奸共幕使え相通し、種々之奸計無所不至、（後略）

【史料二】からは、正姫は既に二条家との縁談があったにもかかわらず、英勝寺の住持として入寺するよう幕命が下されたことがわかる。十一月初めに二条家へ破約を伝える直書が送られたことからすると、幕命は少なくとも十月中には下されていたと考えられ、この書状が送られた時点で正姫の入寺は既定の事実となっている。

たのである。

正姫の父徳川齊昭は万延元年（一八六〇）に亡くなり、この書状が書かれた元治元年は正姫には父がいない状態であった。先述したように英勝寺は嘉永六年以降、住持不在の状態が続いていたが、これは「烈公様（齊昭一筆者注）兼て思召も被為在、以来御無住ニ可被成旨御遺書も有之候処」とあるように齊昭の強い意向によるものだった。しかし、この書状が書かれた元治元年には「黄門（齊昭一筆者注）之心中云々、不可言候」<sup>14</sup>とあるように既に齊昭の意向は藩内でも薄まっていた。

ところで、直書そのものが確認できないため詳細は不明だが、【史料二】によればこの直書を通じて二条家へ縁談の破約が伝えられたことになっている。しかし、次の【史料三】をみるとどうも事情が異なるようである。

【史料三】<sup>15</sup>

一、英勝寺様（正姫）御事、下地二条様え御縁談有之所、其後御入寺如何哉之事、右御入寺之儀は、前々より御例有之候御事、殊ニ、当節御国元も御混雑之折柄、御縁談被遊候得は、御失墜も不一方、且、去春御上京之御沙汰も御座候所、其節は、二条様より御断ニ相成り居申候由にて、旁々御先例之通り、御

入寺被成、二条様えは御付届ケのみ之  
御様子ニ御座候

二条家への縁談が決まっていたにもかかわらず正姫が英勝寺へ入寺することになっただけでなく、藩内で内部対立が起きているなかで縁談を進めては「御失墜も不一方」とのことから、二条家の方より正姫の上京を断わっている。これは縁談の破約を暗に示していると考えられる。おそらくこれは水戸家の事情を聴き、公家の二条家が体面を保つために自ら破約するという形をとったのではないかと推測できる。当時、水戸藩内では正姫をめぐり二条家との縁組

### 3.2 正姫の入寺と住持生活

長い間住持がいなかった英勝寺からすると、正姫の入寺は朗報であった。正姫の英勝寺での様子については『御用留』でみることができる。ただ『御用留』には正姫が入寺して三年後の慶応三年（一八六七）正月から六月までのものと明治二年（一八六九）六月から九月までのものが一部残されているだけで、編者の小丸氏によれば寿福寺の史料（「参暇日誌」）に若干記録が残っているに過ぎない。管見の限りではあるが、正姫に関しては先行研究をみても『逗子市史 通史編』に英勝寺での様子が簡単に表記されているだけである。

【史料四】<sup>16</sup>

英勝寺 へ書面到来  
以手紙致敬達候、今般、水戸殿御妹正姫殿  
御事、英勝寺住職被仰出候  
依此段為御知得御意候  
十一月十一日  
(中略)

を進めるか、または幕命に従い英勝寺へ入寺させるかで意見が対立していた。だが、英勝寺への入寺を支持していた諸生党が優勢であったこともあり、結局、正姫は元治元年十一月二十九日に江戸の小石川藩邸から鎌倉英勝寺へ引き移った。

なお、斉昭にはたくさんの子があり、元治元年の時点でも正姫の他に未婚の娘が数人いた。そのなかでまだ六歳の正姫が選ばれたのは、おそらく前代の住持たちが約六、七歳頃入寺した先例に従ったことによるものと思われる。

英勝寺殿十一月廿九日御着而、最早御剃髮  
等御礼式相済候趣ニ付、御留守居高安与左  
衛門殿へ伺書差上候処、晩方返書到来、相  
見仕候所、明後十一日四時半時御入り可被  
成様申来、是に付海蔵主毎度被申候者、英  
勝寺行之時者同道可致被申候に付、書状遣  
し候得者、同様伺被成候所、明十一日四つ  
半時、御入り可被成旨申来候に付、十一日  
同道之積り

【史料四】によれば、正姫の入寺の件は英勝寺側へ遅くとも十一月十一日に知らされていたことがわかる。そして、二十九日には正姫は英勝寺へ引き移り、およそ五年間そこで過ごすことになる。前述したように英勝寺は仏教宗門としての性格が薄かったため、正姫は住持になっても宗教的な生活を強いられるような様子もなく、水戸徳川家の姫としての生活を続けていたようである。例えば『御用留』には、正月は祝いのため訪問者の御目見え（慶応三年正月頃）、

三月は雛祭り（慶応三年三月三日）を催している様子が記述されている。その他にも水戸から役人の訪問や貸附等の記録もみえるが、それらは表（公的な事務）のことであったことから、正姫は住持であっても関係することはなかった。

また、『御用留』には度々外出する正姫の姿なども書き残されている。

【史料五】<sup>17</sup>

- 一、今日、御山地蔵尊、七福神へ御参詣遊ばされ候に付、四時出仕は御用捨、九時触にて罷り出で候、御供御三の間詰計り、七時前御下座敷へ御帰りなされ候事（後略）（慶応三年正月廿七日）
- 一、今日御山へ入らせられ候に付、四時出仕は御用捨、昼後御下座敷へ出仕、御山へ入らせられ、西木戸外、七曲り下まで御出、御摘草の上、夕七時頃御下座敷へ御帰り相成り候事  
但西木戸外へ御出候御沙汰も之有り候に付、大小も帶し罷り出候、御供は御三の間詰計り也（慶応三年二月十三日）

#### 4. 正姫の還俗と縁組

正姫の還俗が決められた日付や正確な還俗日に関して『御用留』には記録が残っていない。ただ『伝記』によると、明治二年（一八六九）七月二十四日に下国して水戸に戻ったことが確認できる。英勝寺の歴代住持は入寺すると終身寺を出ることはなく、まして還俗は前例のない異例な出来事であった。それにもかかわらず正姫の還俗が実施されたのは、もちろん明治維新

一、俄の御催しにて夕七時頃、御山へ入らせられ、大町天王、地藏へ渡御、御覧遊ばされ候に付き、御三の間詰の族、御供に罷り出候（後略）（慶応三年六月十四日）

一、今日地藏尊御祭に付、（中略）御山地蔵尊へ、方丈様御参詣に付、罷り出候様に八半時頃触之有り（後略）（慶応三年六月二十四日）

一、快晴に付、今日江の島御参詣、明け六つ時過ぎ御発駕、極く御忍びに付、相棒駕籠へ召され候（中略）夕七時半時過ぎ、御機嫌能く御帰殿在らせられ候事（後略）（明治二年七月九日）

【史料五】にあるように、正姫は主に寺の西方にある源氏山に地藏参りをしたり、または摘草をしたりするなどよく外出していた。下国を目前に控えていた時にも江ノ島まで行っている。このように正姫は英勝寺の住持であっても寺に閉じこもっていったわけではなく、鎌倉内の参詣ならば比較的に自由に出かけられたようである。

や明治二年三月の版籍奉還によるところが大きい<sup>18</sup>。だが、直接的には明治政府から明治元年三月に「神仏判然令」が出されたことで全国的に神仏分離と廃仏毀釈の流れが生じたことが、正姫が英勝寺に留まることをより困難な状況にしたと思われる。父徳川斉昭の死後、水戸藩内で諸生党が実権を掌握した際に、十年も住持空席だった英勝寺に縁談のあった正姫の入寺が決

められた。しかし、戊辰戦争以降、諸生党が藩内での党派争いで天狗党に敗れると、元来、儒学的側面の強い水戸藩ではそれまでの仏教政策が否定され、正姫も水戸に戻されることになったのである。

明治二年七月二日、【史料六】にあるように正姫の下国供並び受許役所の取調べのため水戸藩から役人が英勝寺を訪れている。

【史料六】<sup>19</sup>

英勝寺様御下国御供並びに受許役所取調べのため、今昼比着致し候に付、上下四人分御台所下され、焚出し御賄断り相廻り候処、逗留の儀も日数に相成べき哉も計り難く候に付、都て生渡に相成り候、一日白米壺人に付五合づつ上下四人分、八百屋物・味噌・醬油・灯油・炭・真木等相渡し候

但二日三日より焚出、四日朝より生米渡しに相成り候、付置き候御中間安五郎は、食いかよいに相成り候（後略）

二条家との縁組も破談となり、また父斉昭も亡くなっているなかで後ろ盾のない正姫を還俗させるにあたり、水戸藩では新たな後見人として水戸徳川家支族である因幡鳥取藩十二代藩主池田慶徳を選任した。慶徳は斉昭の五男であり、元々は正姫の異母兄にあたる。正姫は池田家の養女として迎え入れられることになった。

七月二十四日、慶徳は水戸に来て正姫と対面した。

【史料七】<sup>20</sup>

二十四日は、(中略) (慶徳が一筆者注) 水戸に入らるれば、台町に御案内の者出で、御迎す、(中略) 御旅館なる弘道館に御着、御夜御休息の後、(中略) 御入城、貞芳院君、

経慈院君、瑛想院君、随姫君、繁姫君に御対面あり、やがて御夜食御酒肴の出づる頃、鎌倉英勝寺の尼君正姫も御着ありて、御対面あり（後略）

『御用留』ではこの日の記録が欠落しているため確認はできないが、【史料七】に「鎌倉英勝寺の尼君正姫」とあることから、この時点（七月二十四日）で正姫が英勝寺から水戸に着いたことがわかる。水戸藩は正姫を慶徳と対面させるなど養女としての準備を進めていくなかで、正姫は八月、正式に慶徳の養女となった。

ところで、正姫が英勝寺から下国した日付について、小丸氏は『御用留』から「下国」の言葉が登場する八月九日から十日頃ではないかとしている<sup>21</sup>。だが、次の【史料八】をみてみよう。

【史料八】<sup>22</sup>

四日、(中略) 正姫君、水戸より帰着せらる

正姫君は、公の御父烈公の御女にして、公には季妹なり、安政五年の御誕生、尼となりて鎌倉英勝寺に住せしが、このたび公の養女にならるゝなり、よりにて、御内女様御事正姫様と奉称候様との違ありしが、この日七つ時御来着あり、老女福岡御見送、同生田御供にて来る、徳川従四位君<sup>23</sup>、貞芳院宮始、方々より御進物あり、五日、福岡水戸にかへる、公、貞芳院宮始へそれぞれ御進物を託せらる

これより、若年寄格浪を御産母とし、実御誕生申上候心得にて、御育申上ぐる様との命あり

これは池田慶徳の『伝記』のなかの記述の一

部である。この【史料八】の記述に従えば、慶徳の養女となった正姫は八月四日に水戸から江戸の鳥取藩邸に到着している。このことから、それ以前に水戸へ下国したことになるが、正姫が還俗しないで「比丘尼」のまま慶徳の養女になったことは考えにくい。さらに『伝記』では水戸から来た正姫を「英勝寺様」ではなく「正姫君」と称していることも併せて考慮すれば、八月四日以前に還俗したうえで下国したものと推測できる。また、正姫の英勝寺の生活で『御用留』にある下国前の最後の記録が七月九日の「江の島御参詣」になり、八月四日には正姫付きの女中および表の役人たちに暇が出されている。正姫の還俗が既に決まっていたとしても下国前から役人が免職されることには違和感があり、『御用留』の十日付の記録に役人たちが下国するという記述は、おそらく英勝寺から水戸

へ正姫と同行した人たちが戻ってきた日付ではないかと考えられる。以上の点からも正姫の下国日は七月二十四日だったことが想定できよう。

なお、水戸藩士たちが去ったことで英勝寺の運営規模は大幅に縮小した。それでも九月には会計局を設置し、貸附金の回収や租税の徴収などをしてやり繰りしていたが、貸附金の回収は難しく財政的には困窮を極めていた<sup>24</sup>。ただ史料によると、貸附金の利子は英勝寺の収入の一部となって明治期にわたり寺院財政を支えていたようである<sup>25</sup>。また、英勝寺領であった池子村は、明治四年の「寺社領上知令」の布告により国に接収された。池子村は廃藩置県により一時水戸県に属していたが、明治四年十一月以降、神奈川県に属することになり、行政上水戸家とのつながりは断たれることとなった。

## 5. 正姫の婚姻

正姫の養父となった池田慶徳には実子が八人（七男一女）いたが、そのうち成人したのは次男と五男だけで、池田家では正姫の他に二人の養女を迎えていた。『伝記』の記述からは慶徳夫婦が正姫のことをたいそうかわいがっていた様子が窺える<sup>26</sup>。正姫が慶徳の養女になってから約一年後、次の【史料九】にあるように池田家の支族である池田徳澄との間で縁組が成立した。

### 【史料九】<sup>27</sup>

公御養女正姫君、東従五位（池田徳澄一筆者注）に御縁組の許可をうけらる  
東従五位より、三日、公御養女正姫君御事、

公、別に思召もなくば御縁組ありたき旨の申入れありたれば、公、承知せられ、十日、藩庁少属を以て、左の如く弁官に進達せらる（後略）

明治四年（一八七一）二月十日、池田慶徳は徳澄と正姫との縁組願を弁官へ差し出すと、二十五日には太政官から縁組承知の旨が通達された。そして、三月三日慶徳は縁組願済みの旨を正姫に知らせた。池田徳澄は因幡国鹿奴藩の最後の藩主で、明治二年（一八六九）には藩みずから廃藩を行い鳥取藩に編入され、縁組が決まった明治四年一月に東京に移り住んでいた。正姫はそれから約一年後の明治五年四月に徳澄



のもとへ輿入れした。

【史料十】<sup>28</sup>

十六日 正姫君、東従五位へ御引移りありかねて、東従五位に御縁組御約定ありし正姫様は、今日吉辰につき、同家に御引移りあり、当節柄御質素の御取構ならば、十三日、御荷物御道具類を送り込まる、十四日には、有栖川宮より姫君に御反物一反、御扇子、御文庫之内を下賜あり、松平従四位始御親族方・公始御一同よりも御祝品の到来あり（後略）

正姫は英勝寺を出てから水戸に戻ってまもなく江戸の鳥取藩邸に藩主池田慶徳の養女として迎えられていた。それから京都を経て鳥取へ移り住むが、明治四年八月には廃藩置県により慶徳一家とともに再び東京に移ることになった。そして、【史料十】にあるように正姫は明治五年四月十六日に池田徳澄のもとに嫁ぐことになるのだが、結婚一年後に若くして逝去した。

【史料十一】<sup>29</sup>

御養女正姫は、去年の春、東従五位の御許に引移られしが、この日俄かに御病にて、午前八時逝去せらる、御年十六（後略）

正姫は牛島先塋に葬られ、敏好比売命と号した<sup>30</sup>。徳澄との婚姻から逝去するまでの約一年間の行跡は記録が残っていないため正姫の死因について詳細はわからないが、『伝記』では「俄かの御病」とある。そもそも正姫の逝去日についてみても『鳥取藩史』では十一月二十五日とあり、また『伝記』には十一月二十二日と食い違いが見受けられるように正確な日付もわかっていないのが現状である。

【史料十二】<sup>31</sup>

一、慶徳長女正子ヲ以、徳澄ニ女ハスニ及テ、松野（徳澄生母一筆者注）ト楽山ノ婢、及ヒ正子の婢ト和セス。徳澄夫妻ノ間、之カ為融心ヲ生ス可キ景況アリヲ以テ、家令大塩弥生等深く松野ノ事ヲ憂ヒ、之ヲ宗家家扶等ニ告ケ、相共ニ徳澄ニ忠告シ、松野ヲ出シテ邸内長屋ニ移シ居シメ、向來家政ニ管セシメサルヲ徳澄ニ約シ、徳澄亦之ヲ諾シ、併セテ右婢等モ亦暇ヲ遣シ、一旦家内ノ不居合ヲ整理ス、然ルニ、明治六年十一月、徳澄妻正子頓ニ死去ス、徳澄之ヲ慶徳始メ親戚ニ報スル甚タ遅ク、慶徳至リ見ルニ及ンテ、不審ノ形跡ナシトセス、医師モ亦其病症ヲ定ル能ハス、一同今ニ至テ之ヲ疑フ

なお、この日の『伝記』の記述によれば、徳澄のもとに嫁いだ正姫（正子）と徳澄の生母である松野との不和が原因で夫婦仲はあまりうまくいっていなかったようである。そこへ宗家が間に入り、松野を長屋へ追いやったことでようやく落ち着いた。ところが、明治六年十一月正姫は突如亡くなる。しかも徳澄側からの知らせが相当遅れていたことも加わり、養父慶徳は不審がり、さらに医師も病症を定められないなど疑わしい点ばかりであったことが記されている。また『伝記』別巻の人物説明に正姫の逝去が自殺であったという記述<sup>32</sup>もあり、逝去日の確定も含め正姫逝去の詳細については今後の課題にしておきたい。

## 6. おわりに

本稿では、江戸時代、寺院と深い関係を結んでいた武家（大名家）女性が幕末維新时期という移行期において寺院から離れていく歴史的過程を明らかにするため、水戸藩ゆかりの尼寺である英勝寺の最後の住持となった正姫の一生を辿った。水戸家の姫が英勝寺に入寺することは、水戸の姫がそこに「いる」ことによって鎌倉の英勝寺とその寺領が水戸藩の影響下にあるという象徴的表象としての役割を果たした。正姫の父徳川斉昭の「廃仏政策」により英勝寺では無住持の時期もあったが、それでも英勝寺は「水戸の御殿」という位置づけから救済策として祠堂金貸附が図られた。斉昭の死後、水戸藩内で党派争いが起き、その影響もあって正姫の英勝寺への入寺が決定された。英勝寺にとってこの正姫の入寺は水戸藩の庇護をあらためて保証するものとなった。

またその一方で、英勝寺に姫を入寺させる水戸藩側にも思惑が働いていた。前例をみると、英勝寺に入寺した女性の大半は実父の不在か養女である場合が多いことがわかる。正姫の入寺の例をみてみても、「廃仏政策」を行っていた父斉昭の死後に幕命によって行われていたことから政治的意図があったことは明らかであろう。ただ本来、武家（大名家）の娘（姫）というのは他家（大名家）との血縁関係において大事な媒体であり、正姫も幼い頃から既に婚約先が決められていた。そうしたなか、幕命で正姫の入寺が行われたことは英勝寺と水戸家、さらに徳川幕府との近世的関係の維持という象徴的な意味合いが強く、六歳頃の正姫本人の意

志が反映されていないことはいうまでもない。このように、正姫を含む江戸時代の英勝寺住持たちは徳川家とゆかりの寺院との関係を保つための存在として、幼いころから別地の「御殿」で「水戸家の姫」という身分を維持しながら信仰のない形式上の住持を務めることになったのである。

明治維新の後、党派争いが収まり版籍奉還を実施した水戸藩は、正姫を還俗させると同時に祠堂金貸附も清算することで、江戸時代長らく続けてきた英勝寺との関係を絶つことになった。水戸藩とのつながりを示す象徴的存在として英勝寺にいた正姫は、還俗するとすぐに池田家の養女となり、水戸藩と英勝寺との政治的・経済的関係は完全に切れてしまった。それによって、正姫は近世大名家の女性として寺院との関係をつなぐ役割から解放され、時代変化を自ら体験したのだが、前近代女性としての生活を維持した。結局彼女は、明治維新という変化に適応する機会を得ることなく早くに亡くなってしまった。社会変化と前近代的価値観の間隙を克服することは、当時大名家出身の女性としては難題であっただろう。正姫の入寺と還俗は、政治利用される江戸時代末期の武家（大名家）の一女性の生き方をよく表す一方で、明治維新以降、それまであった武家と寺院との近世的関係が絶たれたことを端的に示す事例といえよう。

以上、本稿で考察してきたように正姫の入寺から還俗、そして婚姻に至る過程は、幕末維新时期に水戸家に生まれた姫が幕府や藩の政治的意

向に左右されるという、極めて時代性を含む事例であったことがわらう。ただし、そもそも水戸藩に備わっていた宗教的態度・性格が明治

維新期の「廃仏毀釈」へとどうつながっていくのか、という点については今後の検討課題としておきたい。

表 1 : 「正姫の略歴」 \* 『伝記』参照・年齢は満年齢。

旧暦	西暦	年齢	日付	主な事件
安政 5 年	1858	0 歳	11 月 15 日	江戸小石川邸 誕生
元治元年	1864	6 歳	11 月 6 日	英勝寺住職の幕府命下る
			11 月 29 日	英勝寺 入寺
明治 2 年	1869	11 歳	7 月 24 日	池田慶徳と対面
			8 月 4 日	池田家藩邸に水戸から着。養女になる。
			8 月 7 日	東京から鳥取へ出発
			8 月 22 日	鳥取に移動する途中、京都に寄って池田慶徳に対面
			9 月 2 日	鳥取に来着
明治 3 年	1870	12 歳	7 月 6 日	池田家の上邸の引移り
明治 4 年	1871	13 歳	2 月 22 日	徳澄から縁組の許可を得る。
			2 月 28 日	池田夫人と勝見に入湯する。
			8 月 24 日	池田夫人と東京に向かう。
			12 月 4 日	鉄槩初の御祝儀。池田徳澄と結納取替
明治 5 年	1872	14 歳	4 月 16 日	徳澄と婚姻。東京池田徳澄邸に移る。
			5 月 6 日	牛嶋弘福寺で池田慶徳の夫人寛姫君の百日祭に参詣する。
			8 月 30 日	池田慶徳の若殿の婚約者である幸姫君の寺嶋邸の引移りに来邸する。
明治 6 年	1873	15 歳	11 月 22 日	逝去

## 註

- 主な先行研究としては、五十嵐富夫『駆込寺：女人救済の尼寺』（塙書房、1989）、井上禅定『駆込寺東慶寺史』（春秋社、1980）、高木侃『縁切寺満徳寺の研究』（成文堂、1990）、パトリシア・フィスター「比丘尼御所の世界—二人の近世皇女の進捗と文化活動—」『身分のなかの女性』（吉川弘文館、2010）、岡佳子「近世の比丘尼御所（上・下）宝鏡寺を中心に」（『仏教史学』42・44、仏教史学会、2000・2002）などがある。なお、井上・高木両氏の著書は主に「縁切寺法」についての研究ではあるが、本稿に関わる「女性と寺院」についても研究対象としていることから参考のためにあげておく。
- 小丸俊雄編『東光山英勝寺御用留』（鎌倉英勝寺、1973）。
- 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史社編』（吉川弘文館、1967）、424 頁。
- 床次和子「鎌倉英勝寺の祠堂金貸附」（『史論』9、東京女子大学、1961）、坂本忠規「河内家と英勝寺、浪人川幹夫」（『鎌倉』99、鎌倉研究会、2004）、三浦勝男「鎌倉英勝寺の領地図」（『金沢文庫研究』15、神奈川県立金沢文庫、1969）などがあり、外に平野智子「両脇侍を伴う宝冠阿弥陀如来像に関する考察—鎌倉英勝寺阿弥陀三尊像龕を中心に」（『美術史』59、美術史学会、2009）などがある。

- <sup>5</sup> 鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』1～5巻・別巻（鳥取県立博物館、1987 - 1992）。以下、註では『伝記』1のように略記する。
- <sup>6</sup> 逗子市編『逗子市史 通史編』（逗子市、1997）、295頁。
- <sup>7</sup> 逗子市編『逗子市史 通史編』（逗子市、1997）、297頁。
- <sup>8</sup> 小丸俊雄『東光山英勝寺』（鎌倉英勝寺、1963）、127頁。また、床次和子氏によると、英勝寺の経済は、私的な奥の経済と、公的な表の経済とはっきり区別していた。奥の収入は住職個人の持参金と積立金などで、天明四年の取調べによると全収入の約8%を占めている（床次和子『鎌倉英勝寺の祠堂金貸附』、『史論』9、東京女子大学、1961、600頁）。また詳細は不明だが、讃岐高松藩主松平家や遠江掛川藩主太田家等の援助もあったようである（『逗子市史 通史編』、304頁）。
- <sup>9</sup> 床次和子『鎌倉英勝寺の祠堂金貸附』（『史論』9、東京女子大学、1961）、592頁。
- <sup>10</sup> 小丸文書。庄次和子『鎌倉英勝寺の祠堂金貸附』（『史論』9、東京女子大学、1961）、605頁から引用。
- <sup>11</sup> 床次和子『鎌倉英勝寺の祠堂金貸附』（『史論』9、東京女子大学、1961）、593頁。また、『御用留』慶応三年三月九日条にも「文化の度より御祠堂金貸付御寺法相立て」とある。
- <sup>12</sup> 元治元年十一月二十日付池田慶徳宛長谷川作十郎・野村彝之介・梅沢孫太郎書状、鳥取県立博物館編『伝記』3（鳥取県立博物館、1987）、168頁。
- <sup>13</sup> 二条齐敬。関白・摂政。母は、徳川斉昭の姉従子。正姫の縁談相手はおそらく彼の息子である二条基弘の可能性が高い。
- <sup>14</sup> 元治元年十一月十日条、鳥取県立博物館編『伝記』3（鳥取県立博物館、1988）、159頁。
- <sup>15</sup> 慶応元年正月十一日条、鳥取県立博物館編『伝記』3（鳥取県立博物館、1988）、208頁。
- <sup>16</sup> 寿福寺「参暇日誌」、小丸俊雄『東光山英勝寺御用留』（鎌倉英勝寺、1973）、419頁。なお、小丸氏は史料上の日付の表記を、例えば【史料四】では一一月一一日としているのだが、本稿では「桂陰庵書状」（『寿福寺所蔵資料』27、神奈川県立文書館所蔵）に基づき十一月十一日と書き直した。
- <sup>17</sup> 小丸俊雄『東光山英勝寺御用留』（英勝寺、1973、392・396・405・412頁）の慶応三年と明治二年の記録から抜粋。【史料五】、【史料六】の読下しの部分は、そのまま引用する。
- <sup>18</sup> 『公文録』水戸藩版籍奉還之部を見ると、明治二年（一八六九）三月、水戸藩十一代藩主徳川昭武は「祖以来受領仕候封土版籍ヲ奉還シ謹テ奉仰 朝裁度不顧恐懼上言仕候」とあり、六月に水戸藩知事となる（茨城県史編纂会『茨城県史料 維新編』茨城県、1969、283頁）。
- <sup>19</sup> 明治二年己未七月二日条、小丸俊雄『東光山英勝寺御用留』（英勝寺、1973）、411～412頁。なお、史料上の「真木」への傍註（薪カ）は筆者が補足した。
- <sup>20</sup> 明治二年七月二十四日条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、233頁。
- <sup>21</sup> 小丸氏が編集した『御用留』の八月十日条（414頁）には、以下のように記されている。
- 一、御下国御供の族並びに御留守の族一同へ、今日御酒下され候事
- 一、木下 亀 蔵
- 注、正姫この頃退寺下国。
- 右御下国供に罷り出、東京まで一統罷り下り候処、問柄へ対し、度々内願の趣之有り候に付、御用達へ内談致し候処、内々間済みに相成り、今日罷り帰り候事
- と書いており、正姫が八月十日頃下国したと小丸氏は判断しているが、十日は正姫の下国に伴った役人たちが鎌倉に帰ってきた日であろう。
- <sup>22</sup> 明治二年八月四日条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、244頁。なお、史料上の「詫」への傍註（託カ）は筆者が補足した。
- <sup>23</sup> 徳川従四位。水戸藩知事徳川昭武。
- <sup>24</sup> 正姫下国後の英勝寺では、明治二年九月三日に「英勝寺様老尼職」が、二十一日には「道心者」などの諸職が次々に廃止され、水戸藩との関係はここで事実上終わったといえよう。
- <sup>25</sup> 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史現代編』（吉川弘文館、1967）、26～29頁。
- <sup>26</sup> 『伝記』には、例えば帰藩する正姫が京都の慶徳を訪れて菓子をもらったり、夫人と勝見の温泉に同行したりしていた様子などが記載されている。
- <sup>27</sup> 明治四年二月二十二日条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、589頁。

- <sup>28</sup> 明治五年四月十六日条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、633頁。
- <sup>29</sup> 明治六年十一月二十二日条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、663頁。
- <sup>30</sup> 鳥取県編『鳥取藩史第一巻』（鳥取県立鳥取図書館、1969）、157頁。
- <sup>31</sup> 明治八年十一月条、鳥取県立博物館編『伝記』5（鳥取県立博物館、1990）、704頁。
- <sup>32</sup> 池田徳澄の人物説明中に「慶徳の養女正子を娶ったが、六年十一月、正子自殺」とある（鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記別巻』鳥取県立博物館、1992、48頁）。

## 参考文献

### <史料>

- 茨城県史編纂会『茨城県史料維新編』茨城県、1969。
- 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史社編』吉川弘文館、1967。
- 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史史料編』吉川弘文館、1967。
- 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史近現代編』吉川弘文館、1967。
- 鎌倉市史編纂委員会編『鎌倉市史近代資料編第一』吉川弘文館、1967。
- 小丸俊雄『東光山英勝寺御用留』英勝寺、1973。
- 『水戸藩史料』吉川弘文館、1970。
- 村上専精 他編『明治維新神仏分離史料第一巻』名著出版、1984。
- 村上専精 他編『明治維新神仏分離史料第三巻』名著出版、1983。
- 日本史籍協会編『鳥取池田文書』日本史籍協会 1927。
- 鳥取県編『鳥取藩史第一巻』鳥取県立鳥取図書館、1969。
- 鳥取県立博物館編『贈従一位池田慶徳公御伝記』鳥取県立博物館、1987 - 1992。
- 逗子市編『逗子市史 資料編』2 逗子市、1988。

### <単行本・研究書>

- 小丸俊雄『鎌倉・扇ヶ谷東光山英勝寺水戸家ゆかりの尼寺』英勝寺、1964。
- 逗子市編『逗子市史 通史編』逗子市、1997。

### <事典>

- 芳賀登 他監修『日本女性人名辞典』日本図書センター、1993。
- 桂文庫編『江戸期おんな表現者事典』現代書館、2015。
- 宮崎十三八・安岡昭男編『幕末維新人名事典』新人物往来社、1994。
- 森繁夫編・中野莊次補訂『名家伝記資料集成』思文閣出版、1984。

### <研究論文>

- 床次和子「鎌倉英勝寺の祠堂金貨附」『史論』9 東京女子大学、1961。



具 知會（く・じふえ）

[生年月] 1983年1月3日

[出身大学または最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 日本近世史、近世女性史

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程

[所属学会] 史学会、総合女性史学会、明治維新史学会

# *Amadera* of Mito family in Meiji Restoration period: The case of a Priestess Masahime in Eishō-ji

JeeHoe KOO\*

Eishō-ji is the only *Amadera* (Buddhist convent) which survives from Edo period to the present in Kamakura. Eishō-in, who was concubine of general Tokugawa Ieyasu, established that temple in 1636. Eishō-in was also a stepmother of feudal lord Tokugawa Yorifusa of Mito domain. For that reason, the princess of Mito family was appointed the chief priestess of Eishō-ji from generation to generation.

However, to the end of the Edo period, financial situation of the Mito family who has been supporting Eishō-ji became worse. For that reason and because Eishō-ji's special position as princess palace, Mito family permitted Eishō-ji to function as Loans of religious fund to subsidize its maintenance costs. However, in 1869, the last priestess Masahime quit the priesthood and the Loans of religious fund were banned. After that, Eishō-ji's influence became weak.

Nowadays, there is not enough research on the relationship between women and religion in late Edo era. Especially, there is no previous research on the process how a priestess returns to ordinary life of elite family's (*Buke*) daughter. There exists various researches about Eishō-ji, (e.g. the Loans of religious fund, Tokonami, 1961) but only Komaru, 1963 made a brief explanation about the priestess of the temple. My research analyses historical documents, such as *Goyōudome* from Eishō-ji, and *Ikeda-Yoshinori Kō Godenki*.

Eishō-ji was a special *Amadera* which had priestess from elite family (Mito family), but no studies focus on the history of these women. This thesis investigates life-cycle of the last priestess of Eishō-ji in 19<sup>th</sup> century. We can gain insight about the changing role of Pre-Modern Women in the society by analyzing the relationship between Mito family and Eishō-ji.

Masahime was born in the year 1858. She was a daughter of Tokugawa Nariaki, the feudal lord of Mito domain. Masahime was going to marry the son of Ni-jo family. However she became a priestess of Eishō-ji by order of Tokugawa government in 1864 when she was 6 years old. Five years later in 1869, she left Eishō-ji and was adopted into Mito family's branch family, Ikeda family. Her adoptive father Ikeda Yoshinori was her brother by a different mother. She married with Ikeda Norizumi in

---

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies Cultural and Human Information Studies Course

Key Words : *Amadera*, Priestess of Eishō-ji, Masahime, Return to laity, Meiji Restoration of Mito.

1872, and she died just 1 year later in the young age of 16 years. After Masahime retired in 1869, Eishō-ji was downgraded and its relationship with Mito family has also ended.

A priestess of Eishō-ji which is situated in Kamakura area is from Mito domain. This means Eishō-ji belongs to Mito domain. Also as priestess of Eishō-ji and a member of Mito family, she could guarantee the social status of the Mito family in her life, as well as demonstrate the ownership of the temple by Mito domain in the Kamakura territory.

Eishō-ji was not directly involved in the anti-Buddhist policy of Mito in late Edo era for three reasons. First, Eishō-ji had a very important position as the princess palace. Second, it was located far away from Mito domain. Third, officially, Eishō-ji was a place of the Loans of religious fund of Mito.

Before Masahime became a priestess there was no priestess in Eishō-ji for 10 years. This was perhaps the intention of Tokugawa Nariaki, her father, who enforced the anti-Buddhist policy. However, Masahime was forced to become a priestess after he died. After the Meiji Restoration, she retired as priestess. This was also influenced by abolition of the domains and establishment of new prefectures. Until then, the priestess of Eishō-ji remained in the temple for her whole life. There was no precedent of her returning to laity. Therefore, retirement of Masahime was very special event. It was meant to sever the relationship between Eishō-ji and Mito family officially. Entering *Amadera* and returning to laity of Masahime has a deep relationship with the political situation of the Mito family. Eishō-ji's role as the princess palace was also ended by the disbanding of the Mito domain and by the new politics after the Meiji Restoration.

I analyzed the process of Masahime transitioning away from the temple during the late Edo era and Meiji Restoration period. From her the short life, we can learn about women of elite families whose decisions were restricted by their family situation.

It is interesting to note that most priestesses of Eishō-ji were without father or adopted daughters. In the further research, I want to examine the relationship between the adopted daughters of Mito family and entering the *Amadera*.